

ゲルニカ1984年

栗本 薫



著者略歴 昭和28年生，早稲田大学文学部卒 主著書「レダ」「火星の大統領カーター」「風のゆくえ」「赤い街道の盗賊」「パロのワルツ」「白虹」「光の公女」
(以上早川書房刊) 他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

ゲルニカ1984年

〈JA252〉

昭和六十二年十一月十五日 発行 昭和六十三年二月二十九日 三刷 (定価はカバーに表 示してあります)		著者	栗本 薫
		発行者	早川 清
		印刷者	草刈 龍平
		発行所	株式会社 早川書房
		東京都千代田区神田多町二ノ二 電話東京(二五二)三一一一(大代表) 振替口座番号 東京六〇四七七九 郵便番号 一〇一	
		乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。	

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

ISBN4-15-030252-9 C0193

ハヤカワ文庫JA

〈JA252〉

ゲルニカ 1984 年

栗 本 薫

早 川 書 房

2315

ゲル
ニ
カ
1
9
8
4
年

本文中の『一九八四年』の引用は新庄哲夫訳による。

「ゲルニカ、という本なんだ」

安田修平はとなりによこたわっている美穂に云った。美穂は面倒くさそうに頭をもちあげる。その顔がコールド・クリームで光っている。

「それが、どうしたの？」

「このあいだ読んだんだよ——それ以来なんだ。気になってさ」

「ゲルニカね」

妻は眠そうな声を出す。修平はふっと不安になった。

「知ってるの？」

「いやあね、ばかにしないでよ——ピカソでしょ。そのくらい、知ってるわよ」

「ピカソが絵の題材にしたのはさ……」

「知ってるってば。何か、戦争で、虐殺か何かあったのよね。ドイツ軍が——スペインかどっ

かの町じゃなかった？」

「スペインだよ。ピカソはその惨状に心をうたれ、戦争の悲惨を訴えるため、巨大な壁画——
だったよな——に描いたんだ」

そのへんになると、自分の記憶の方もあいまいになっているのを認めないわけにはいかない。
「そのへんのことは、その本には書いてなかったからね」

修平は云いわけがましく云って、タバコに火をつけた。

「煙」

「あ、ごめん——でね」

妻が、積極的な関心を、この話題によせてこないのがかすかな不満になってくすぶっている。
しかし、今夜こそ、彼は、自分の内にわだかまっているものを、ことばにして吐き出してしま
いたかった。でないと、彼のなかにつのってゆくものは、巨大なかたまりとなって、いつか、
のどをスポリとふさいでしまいそうな気がするのだ。

「ピカソが描いたから、有名になったけどね。では、ゲルニカそのものについてというと、わ
れわれ——ことに日本人は、あまり知っちゃいないってことが、はじめてわかったんだ」

「——三つ目のある女とか、三本腕の男かなんか、描いてあるんじゃないかった？」

「いや、よく知らない」

「あなた、絵には弱いものね——私も、でも、ピカソってあまり好きじゃない。だって、変よ。
三つ目のある女とか描いて、どうして戦争反対なのかしら」

「ピカソは、どうでもいいんだ」

修平はいくぶん苛々して来た。

「ゲルニカの話だよ」

「スペインにドイツ軍が——ヒトラーでしょ？　せめこんだの。たしか、フランコ總統つてのがいたわよね……首相が、それでもつて、ブランコつていうの。ヘンな名まえだから、よく覚えてるわ」

美穂はくすぐすとかわいらしい笑い声をたてた。

「あれえ——でもいま、スペインつて、ファン・カルロスつて王さまいるのよね……おかしいなあ。いつのまに、王制にもどったんだろ」

「ゲルニカの話、ききたくないらしいね」

修平はつつけんどんにいう。美穂は後悔したらしい。

「ごめんね。話して」

「……もう、いいよ」

「そんなこといわないで。なあに、ゲルニカが？」

「——うん。だからね」

修平はしぶたうと云う。もう、口をひらく前の熱意と、妙な、せっぱつまった感覚は消えうせている。

「ほくは、ゲルニカつていう本を読んだんだよ。その中に、ちょっと、おもしろい——という

か、気にひっかかることがあったんだ」

「ええ——？」

美穂は目を大きくして、修平の話をねっしんにきこうとしている。大恋愛のすえ、やっと結ばれた恋女房なのだ。かわいい見かけに似あわず、社会的な関心も、行動力もあるし、本もよむ。柔軟な好奇心もまだ失っていない。そこが、修平は好きだった。ひと粒種の竜太は子ども用のベッドの中で小さな寝息をたてている。平和で、しっとりとした夫婦のかたらいとやすらぎの時間が、ひっそりとそこにある——はずなのだ。

「つまり、ゲルニカの町には古い、由緒ある教会があったんだ。それがあるので、京都と同じく、ドイツ軍は、この町だけは攻撃しないだろう、と町人^{びと}たちは考えたんだな。ドイツ軍だつて、信仰はあるだろうし——それに、軍事上さして重要というわけでもないし」

「ええ。それで？」

話しているうちに、失せていったあの感覚がまた少しづつもどって来た。修平の口調は熱をおびはじめた。

「ゲルニカから数キロはなれた町はとくに爆撃され、ドイツ軍が進軍してきていた。その町の人びとや、そのへんから退却してきた兵士たちは、ゲルニカをとおるとき、もうじきドイツ軍がくる、早く町をすてて逃げろ、と云ってもっと先の何とかいう町をさして逃げていった。しかし、ゲルニカの人々は信じなかったんだ」

「……………」

「この町だけは、ひどい目にあうわけはない——大きな病院もあるし、国家の文化的財産である古い教会もある。そう思って、人びとは平和に、いつもと少しもかわらぬくらしをつづけ、肉や牛乳をかい、恋人たちはデートをし、子どもたちは学校へゆき、女たちは今夜の献立を考え……ごくわずかに、その警告を重くみて、子どもたちを疎開させるため、バスにのせた親もいた。しかし、大半は、まだいいだろう——まだそこまでは、せっぱつまってないだろう……いずれ、戦場が、この町の近くにもやってくるのはしかたないとしたところで、それは今日や明日ではないだろう、そう考えていたんだ。この町を、古くからの家をひき払って逃げたり、疎開しなきゃならないが、それには荷物をまとめたり大変だし、せっかく、この週末のごちそうに、このごろじゃ手に入りにくい肉を手に入れたから、あれをたべてから——となりの人たちだって、別にあわてて逃げようともしてないし。町長も、心配いらないだろうといっていたし……中には、ひそかに対独協力をしているから、ドイツ軍がきても自分だけは無事だ、と考えて安心していたものもいる。ともかく、まだ今日は大丈夫だ、というありとあらゆる理由をつけて、人びとは、明日になったら疎開を考えよう、あさってには——でも今日はまだ昨日と同じようにすぎてゆくだろうと、そう信じきっていた。何のしるしも、予言も、神のおつげもなく、いつも今日一日が何とか無事におわり、人びとは、いつも昨日と同じ一日をはじめ——その間に、かれらのまるきり知らぬところで、フォン・リヒトホーフェンというドイツの将軍が、ゲルニカの運命を決めていた——」

「あら、私それ知ってるわ」

美穂が口をはさむ。

「リヒトホーフエンって、それ、『レッド・バロン』って映画に出てきたわ。撃墜王でしょ、ドイツの」

「そのリヒトホーフエンは、この將軍の甥かなんかだよ」

修平は辛抱づよく、

「ぼくが云いたいのは、そんなことじゃない。そうして、不安を抱き、いつかは何かがおこることをなけば確信しつつ、少なくとも今日は大丈夫だろう——と、そう思って毎日をすごしてきたゲルニカの人びと、そのゲルニカに、その運命の日、突然、ドイツの爆撃機があらわれるんだ。——何がおかしいんだ？」

「あなただったら、活動弁士みたいな棒読みをするんですもの。『そのゲルニカに、運命の日、突然……』なんて」

「活動弁士とは、きみこそいいかげん古いじゃないか。いいからきいてくれよ。その日は快晴だった。誰も、何ひとつ、予感してはいなかった。牧童は羊をつれてゆき、子どもたちは学校からかえってきて遊びにゆき、教会ではミサが行なわれ、人々は勤勉に立ち働き——」

「ミサって日曜にしかやらないんじゃない？」

「うるさいな。そのとき、ぽつんと空にあらわれた黒い点が、しだいに大きくなり、そして爆弾がふってくるんだ。——何千人の老若男女、子供たちが、一瞬にして死んだ。平和な美しい町ゲルニカは、次の瞬間、がれきと死体にみちみちた焦土にかわってしまった」

「……」

「その本には、何人死んだか、正確なところが書いてあったが、あいにくそこまでは覚えてない。しかし、何千人というのは、決して少ない数じゃなかった。この町のほぼ何分の一というくらいの人数だったんだから。——だがぼくがいたいのは、そのことでもない。ただ——かれら、ゲルニカの住人にとって、爆弾と死は、あまりにも突然ふり注ぎ、いまが第二次大戦のまっただ中であり、次の瞬間この町も戦場になるかもしれないのだ、という事実を、かれらがつい、うっかり忘れていたことの、あまりにも高くついた代償だった、ということなんだ」

「あら、でも、それは」

美穂は楽なように寝返りをうって云った。

「ヒロシマ、ナガサキだって、そうだったはずよ。誰もあんなこと、予感してはいなかった。みんな、学校や会社にいたり、マリ遊びをしたり、洗濯ものをほしたり——いつものとおりに生活していたんだわ。そこへ、突然、B-29が——」

「きみは、ぼくのいうことを、わざとはぐらかしているか、わからないふりをしてるんだろう」

再び、苛立ちがもどって来た。修平はきびしい口調で云った。

「ぼくがいつてるのは、そういうことじゃないとわからないほど、きみがバカなわけはないんだ。いいかい、ぼくが云ってるのは、死というものはふいにやってくるって話じゃない。広島や長崎の人びとは平和にくらしてたかもしれないが、しかしいま日本が大東亜戦争のまっただ中

だ中にあり、敵が上陸してくれば本土決戦だ、という覚悟はあったさ。夫や兄や息子は出征していたし、戦況が不利だ、ということぐらいは、うすうす感じていただろうし。いいかい、ぼくのいうのはゲルニカの人びとは、戦いがおこっていると思っていなかった——少なくとも、戦争はどこか遠くでやっていて、ここにまでは来っこないと思っていたのではなかったか、ということなんだ」

「なにより、いきなり、そんな、気色ばんで」

妻は唇をとがらせた。

「第一、そのゲルニカと、私と、いったいどういう関係があるの？ いきなり、私をどなりつけること、ないじゃないの？ そのゲルニカがどうだっていうのよ？」

「どなりつけてなんかいないじゃないか」

苛立ちは消え、深い徒労感が彼をとらえた。

「でも、そうきこえたらごめんよ。——つまりだね、ぼくのいいたいのは——この話、ゲルニカの話のポイントは……」

わあ……夢でもみたのか、ふいに竜太の大きな泣き声が子ども用ベッドの方からひびいてきた。竜太は、どちらかというと、神経質な子どもである。

「ちょっと、見てくる」

美穂が布団をぬけだしていく。しきりとなだめる声と、竜太のねぼけ声がきこえてきて、ふっとただひとりとのこされたような孤独感が修平をおそう——愛する家族たちと共にいるの

にだ。

（おれは、疲れているんだらうか。——いや、たしかに、ひどくおれは疲れている。それももう、ずっと前から、長いことだ。長いこと、疲れつづけて、少しも楽になったことがない）

一晚眠ること、あらたな、よみがえるような活力をえて、新しい一日に挑むことができたのは、もうずいぶん昔だったような気がする。このところ、眠るのは、まるっきりからっぽになってしまったガソリン・タンクに、また次のガソリン・スタンドへゆくまでの、五、六百メートル走るための最少限だけガソリンを入れるのと、同じことに思えてきていた。眠らなければ、もちろん、どうにもならなくなってしまうだらうが、しかし、眠ったからといって疲れがとれるわけではなく、ただ一時しのぎにごまかしたにすぎない。

（ときどき、これほど疲れているのに、眠るのがいやになるときがある。——少しばかり眠っては、また動きはじめるのが、とても苦痛で、いっそ眠らないで、疲労の限界まで、いってしまえば——そこでどうにかなるのではないか。ぶっ倒れてしまえば、本当にそのときこそ休めるのだと……こうして、疲労が真に底を割る寸前に、五、六センチ底入れして、それでまた疲れをつみかさねているのは——何だか、生殺しみたいだ。拷問台で、死ぬまではゆかぬようにと、気をつけていたぶられているような……）

（しかし、なぜ、おれはこんなに疲れてしまったんだらうか？）

はた目からみれば、仕事も順調、手がけたドラマ三本がたてつづけに高く評価され、順風満帆にようやくなりかけた、というところだらう。三十六歳の働きざかり、家庭的にも、愛妻と

三つの子ども、誰にも何の問題があるわけでもない。

何ひとつ文句のつけようのない、幸福で充実した人間が、もしいるとすれば、それこそ彼のような人間であるはずなのだ。

それなのに――

「ごめんなさい。やっと寝たわ」

美穂がもどって来て、彼のとなりにもぐりこんだ。

「あの子ったら、ねぼけるくせがいつまでもぬけないのよ。お医者さんにつれてってみようかしら」

「別に、病気じゃあるまいし、いいだろう」

「何か、原因があるのかと思って、ひるましたことや食べたものを、毎日書いてみているんだけど」

「夢でも見るんだよ。大人だって、そういうことはあるだろう」

美穂は、一から十まで完璧というわけには、もちろんいかにせよ、しかし、まず自分には他には考えられないくらい、よい妻だと、修平は思った。話もわかるし、働き者だ。料理も家事もそつなくこなし、いつも身ぎれいになっている。同期のディレクターの、青野の細君など、美穂より若いのにすでにタイヤをはめたような三段腹だし、金田の女房は美人だがおそろしくだらしなくて、亭主に毎晩、持ち帰り弁当をあてがうそうだ。となりの家は、何をしているのかよくわからないが、一週に二、三回のわりで、奥さんの悲鳴と金切り声、旦那の怒鳴り声や、

ものの割れる音がきこえてくると美穂がいやがっている。しかし、自分が旦那でも、となりたくなるだろうと思うような奥さんで、何度云つても、こちらの玄関前へごみをはき出すし、ベランダから汚れ水をこちへ流す。文句をいうとしんねり強い白い目でじろつと見て、ねちねちとからんでくる。

たしかに、知りあいのどの男の妻とくらべてみても、美穂はいい妻だといわねば嘘だった。それ以上、何かを望むとすれば、欲張りといわれてもしかたないかもしれない。有能で、かわいらしく、実があつて、働き者で、やさしい妻。

「ねえ——さっきのお話、なんだったの？」

そつと、修平の髪をさぐりながら彼女がきいた。彼はタバコを消した。

「いや。いいんだ」

眩くように云う。考えてみれば、たしかに、何をどう云いたいかさえさだかではなかった。

「何だか、ヘンね、あなた。いつもと、ちがうわよ」

こんどは妻のほうを追及した。修平は妻をひきよせた。

「きつと、少し疲れているんだよ」

云いわけがましく云いながら、そのことばとはうらはらに、彼の手は妻のからだをまさぐりはじめている。美穂が、くすんと甘えるような笑い声をもらした。

*